

理性による人類の統一に向けて：批判による誤りの認知から学ぼうとする用意のあるすべてのひと  
びとに開かれている、ポパーの批判的合理主義

カール・ポパー著、神野慧一郎、中才敏郎、戸田剛文監訳、『カール・ポパー 社会と政治——「開かれた社会」以後』、ミネルヴァ書房、2014年（書評）

秋田大学 立花希一

私が間違っていてあなたが正しいのかもしれない。そしてわれわれは物事を理性的に語らうことで、自分たちの誤りをいくらか訂正することができるかもしれないし、おそらくはわれわれの双方とも真理に近づき、正しい仕方で行為することができるだろう。

ポパー、本訳書、262頁

20世紀の偉大な哲学者のひとりと目されるカール・ポパーが1994年に逝去してから今年で20年である。他の哲学者と異なり、ポパーの影響は、哲学者に限らず、自然科学者（物理学、神経生理学、生物学等）、社会科学者（経済学、法学、社会学等）、心理学者、言語学者、教育学者、芸術史家、政治家等にまで及び、その中にはノーベル賞受賞者も含まれる<sup>1</sup>。ポパーが刊行した著作は、『探究の論理』と『認識論の二つの根本問題』（英語版『科学的発見の論理』の前身）を除くすべてが邦訳されており、ポパーの弟子たちの編集による著作もかなり邦訳されている（本訳書43-46頁）。

本訳書は、ポパーの未公開論集、*After the Open Society: Selected Social and Political Writings*, edited by Jeremy Shearmur and Piers Norris Turner, Routledge, 2008、493頁の48章のうち15章分に相当する抄訳である。三分の一ほどに切り詰められているので、原著の内容が十分に伝わらないのではないかという危惧を抱かれるかもしれない。しかしながら、監訳者解説にもある通り、内容が重複するものを省くなどの方針により、原著の重要な論文が精選・翻訳されている（323頁）。

書名から明瞭なように、本訳書はポパーの政治哲学者・社会哲学者としての思想が述べられているが、先ず目につくのは、バーリンとハイエクへのポパーの手紙（6、9章）である。かれらの思想の比較に興味のある読者には必読書といえるだろう。

批判的合理主義に共鳴する者のひとりとして、自分の研究視点から3項目について問題提起することによって、書評に代えさせていただきたい。

#### 1. 現実政治・現実社会と格闘する哲学者：ポパー

歴史を振り返ると、哲学者は現実の社会や政治の問題を直視し、各人のもてる能力を最大限に発揮して大所高所から長期的な展望をもって、より良い解決策を模索してきた。古代において、ソク

---

<sup>1</sup> 拙訳、ブライアン・マギー、『哲学と現実世界：ポパー哲学入門』、恒星社厚生閣、1-2頁。特筆すべき最近の人物に、物理学者デイヴィッド・ドイッチュがいる。David Deutsch, *The Beginning of Infinity: Explanations that Transform the World*, Penguin Books, 2011（邦訳『無限の始まり』、インターシフト、2013年）参照。

ラテス、ディオゲネス（66-67頁）、プラトン、アリストテレス然り、近代においても、ホッブズ、スピノザ、ロック、ルソー、カント、ヒューム、ミル等、枚挙に暇がない。しかしながら、自戒を込めてであるが<sup>2</sup>、概して日本の哲学者にはこの側面が希薄である。このような現状にあつて、神野慧一郎氏は、監訳者解説の中で、本訳書で語られたポパーの思想・発言（特に13章）に触発され、日本の政治的・社会的問題に関する見解を披瀝し、こうした問題を巡る批判的議論の喚起を促されている。

## 2. 宗教的な批判的合理主義者の可能性

監訳者解説の中で、神野氏は異なる文脈においてであるが、拙稿「ポパーの宗教観再考」（2013年）<sup>3</sup>に言及された（344頁）。この拙稿はまさに、本訳書の原著を読んだ結果（主として3章）、1989年の拙稿「カール・ポパーとキリスト教」<sup>4</sup>で述べた自分の見解の誤りに気づき、それを改善するために執筆したものである（拙稿冒頭で自分の古い見解の誤りを明記した）。無神論者のハンス・アルバート、ウィリアム・バートリー、小河原誠氏らの批判的合理主義を知る者は、批判的合理主義は反宗教的であつて、宗教者による批判的合理主義の採用は不可能ではないかと判断されるかもしれない。それに対して、拙稿は、ポパーの批判的合理主義が、さまざまなどんな特定の宗教を保持している（あるいは保持していない、さらには反対している）ひとつとでも採用可能な立場であることを論じた。本訳書は、宗教に対するポパーの（これまで知りえなかった）公的・私的見解を知ろうえでも貴重な文献である。

## 3. 理性による人類の統一に向けて

『開かれた社会とその敵』24章で提唱された「理性による人類の統一（rational unity of mankind）」という理念は、ポパーの生涯にわたる至高の理念といえるもので、本訳書でも、この理念に関連する議論が随所で述べられている（8、11、12、14章）。この理念は、今日においても依然として追求に値する重要な課題のひとつであろう。この点でも、宗教 vs. 理性という二分法ではなく、宗教的、非宗教的を問わず、批判（自己および相互批判）による誤りの認知から多少なりとも学ぼうとする用意のあるすべてのひとつとに開かれているポパーの批判的合理主義は有力な思想といえよう<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> 些細な貢献だが、拙稿、Can the Japanese Learn to Welcome Criticism Openly, *Karl Popper A Centenary Assessment*, Vol. I, edited by Ian Jarvie, Karl Milford, and David Miller, Ashgate, 2006, pp. 203-15. Is Taishō demokurashī the same as Taishō democracy?, *Japan's Multilayered Democracy*, edited by Nissim Otmazgin, Sigal Ben-Rafael Galant, Alon Levkowitz, Lexington Books, forthcoming.

<sup>3</sup> 「ポパーの宗教観再考」、『秋田大学教育文化学部研究紀要：人文科学・社会科学』、第68集、2013年、103-18頁。

<sup>4</sup> 「カール・ポパーとキリスト教」は、「カール・ポパーの宗教観：ユダヤ教・キリスト教・批判的合理主義」と改題し、ポパー哲学研究会編、『批判的合理主義』、第1巻、未来社、2001年、240-51頁、所収。

<sup>5</sup> 批判的合理主義と宗教の関係についての他の考察は、以下の拙稿参照。Tolerant Rationalism, *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol. 9, No. 5, 2000, pp. 245-54. 「宗教的中立性の原則からみた宗教教育について」、『秋田大学教育文化学部研究紀要：人文科学・社会科学』、第69集、2014年、27-35頁。